

チアリーダーのモチベーションとパフォーマンスを維持できる要素

スポーツ科学研究科 健康スポーツマネジメントコース

5023A307 奥山若菜

研究指導教員：中村好男

1. 緒言

日本ではアメリカンフットボール（以下、アメフト）のトップリーグ（以下、Xリーグ）が存在し、そこでは同じくアメリカ由来の応援チアリーダーも活動している。チアリーダーには大きく分けて、応援チアリーダーと競技チアリーダーに分かれており、Xリーグ内では前者としての活動が盛んである。

日本でのアメフトの試合は1Qあたり12分で4Q、HT15分、試合時間は約2時間である。アメフトの特徴としては試合が頻繁に止まるので、その度にチアリーダーにはパフォーマンスの機会がある。1試合あたりのチアリーダーの出演時間は他リーグと比較しても圧倒的に多く、その反面、体力的に求められる部分は多いのが現状である。現在X1チアでは1チームを除き、全員が女性のみで構成されており、女性特有の月経や妊娠等の体調の変化は起こり得、実際に対応に苦しんでいるチアリーダーの存在がある。

2. 目的

本研究では、厳しい環境下や出演困難なメンバーがあっても、チアリーダーがモチベーションとパフォーマンスを維持できる要素を明らかにする。

3. 方法

対象：2023シーズンにX1所属のSチーム専属チアリーダー（以下、Sチーム）

方法：Sチーム3年目チアリーダーの筆者による参与観察
メンバーに欠員への対応や出演が困難となった際の経験や思いについて個別に半構造化インタビュー（2023年11月19日、2024年1月6日）し、逐語録を作成

SCAT法、M-GTA法を用いて逐語録を分析

また、実際に行ったパフォーマンスを検証し、サイドラインでの交代制におけるパフォーマンスの維持について考察する。

4. 結果

1) 他リーグでの選抜制を用いたパフォーマンス

選抜制は当日の欠員があっても対応できる体制ではあるが、モチベーションの維持が難しいケースがあるのは事実である。欠員が考慮されたパフォーマンスでも、チアリーダーは「全員が参加できる」というのはチアリーダーのモチベーションの1つとなりうる可能性があるが、選抜制には「全員参加」を前提としない形式であるため、交代要員があっても、チアリーダーの魅力の一つである「全員参加」が叶わない環境であった。他リーグから移籍したルーキーのBは「やっぱり練習するんだっただけ出たいし見てもらいたいの。本当に（練習の）やり損でした。結局練習したって上手くなったって選ばれても怒られるし。」と語っていた。

2) 勤務都合による環境の変化

どのリーグでも言えることだが、チアリーダーだけで生計をたてることは無理に等しく、本職あるいは学業の傍らでチアリ

ーダーをしている。SチームのGは出演できない事に対し、全員で行うパフォーマンスに迷惑をかけてしまう、という認識もあったが、それ以上の「出演したい気持ち」「パフォーマンスの機会」「心の拠り所」のポジティブな要素の喪失という点で出演できない悲しみや苦を強く感じていた。フォーメーションが変わる事が申し訳ない自責、自分の為に崩れてしまうことを危惧しつつも、同じ熱量、それ以上の「一緒に出演するための過程と結果」を強く望む葛藤もここではみられている。

3) チアリーダーの潜在的な認識

Sチームのメンバーに、試合中のパフォーマンスから一時離脱することについて2024年1月にインタビューを行った。

Fは、サイドラインやフィールドは「ステージ」と表現し、且つ、そのステージに立ちたくても立てない人がいるという意識が、Fがづらい状況でもサイドラインに立つ力になっていた。試合に立ち続けることがチアリーダーの価値であり、サイドラインに立てる基準が自分ではなく他者の捉え方が重要であることも語りながら、全員が出演することに価値を見出している。

また、Bにとってはパフォーマンスをする上では「美しい、あるいは健康的なチアリーダー」が理想であり、それを維持する為の手段としてパフォーマンスから離脱といった行動になっており、「理想から逸脱する状況」だとも言える。

4) 試合中に起こる体調不良と欠員

3つのエピソードを通じて、左右ができるだけ対称となる形を意識して、メンバーが抜けた直後からパフォーマンスから行っていた。選曲は、曲とパフォーマンスの理解ができているスタッフが担当し、主にフォーメーションの変更が不要な応援を煽るパフォーマンスでサイドラインの演出を続けられていた。

3つの共通点として、サイドラインから離脱しているのは全て試合の前半にも関わらず、ハーフタイムショーは想定されたメンバーで行っている点である。「ハーフに重きを置いていたところはあった。サイドラインももちろん大事だけど。今一人抜けるか、みんなのハーフを駄目にするかって思ったら、ハーフはできた方がいいかなって。」というA（3年目ベテラン）の発言からも、ハーフタイムショーはパフォーマンスの中でも最重要視されており、全員でのパフォーマンスの前提となっていることが伺える。

5) セミファイナルハーフタイムショーでの代役

代役を引き受けるという事に抵抗やネガティブな感情の表出はなく、むしろ責任感や貢献のような意思が汲み取れた。それと同時に、メンバーが一人欠ける事が「悪」と認識されているからこそのOGの提案やCの「チームを救う」といった言葉で思いを表出した。

2021年のセミファイナルでは約5分のパフォーマンスのうち、前半は1曲を1チームあるいは2チーム合同で8×4カウントの演技を4チームずつ交代して行うパフォーマンスであっ

た。多くのチームは自チームの既存の演技を曲に当てはめるケースが多かったが、Bチームは人数の関係で他チームと合同でパフォーマンスとなっていたため新しく振り入れを行ったが、Cは代役を引き受けてから本番まで3週間の期間があり、対応ができた。その後、そのチアリーダーは復帰していないが、CはSチームに所属することとなった他、2023 シーズンでBチームは再編成を行い、全員が子を持つ母で構成されたチアリーダーとなっており、Cも「ママになってもチアリーダーを楽しめるっていいですね」と笑顔で話していた。

6) 直前に唯一の役割をもつメンバーの欠場

2021年当時はコロナ禍でボイスリーダー以外の声出しは協会から禁止されていた為、ボイスリーダーは応援における重要なポジションであった。そのボイスリーダーが欠員になった際に対応した当時の幹部の会話の中からは、「見た目」を判断基準に穴埋けを埋める事を考慮してきた事が伺えた。また、7日目バイスキャプテンからは「Xは」というフレーズも何度か出てきており、SチームだけでなくXリーグのチアリーダーの在り方の認識として、パフォーマンスでの欠員を考慮していないことも示唆された。

7) DREAM BOWL2023 の実際

オープニングパフォーマンスやハーフタイムショーは全員で出場することができ、サイドラインもQTで交代を行うことで全員が前半後半でも30分ずつパフォーマンスができ、セルフマネジメントを行える時間を確保できるという観点からも、このDREAM BOWLでのパフォーマンスは、「全員参加」を叶えつつ、試合中にセルフマネジメントを行う余裕や交代要員を確保できるという点での利点がある。しかし、気候や体調に問題がない場合には、この交代制がなくともチームのパフォーマンスを維持できる点では難点である。

5. 考察

1) モチベーションを保つ要素

「全員出演」が前提であることのモチベーション

インタビューでは、全員出演を魅力と考える言葉は全員から聞き取ることができた。Xリーグのチアリーダーは全員出演できることが前提であり、補欠・リザーブの概念は持ち合わせていない事が伺えた。また、それが魅力であるという事的前提には「出演したい」といった、出演自体を強く期待する念望があることもいえる。Gも仕事の両立に悩む時期が長かったが、その悩みも、出演の念望と仕事での自己実現の葛藤であったともいえる。

離脱しても戻れる場所

Aは、サイドラインでは1試合の中で何度か繰り返して行うパフォーマンスも多い事も含めて離脱するタイミングを考えていた。試合中の体調不良で離脱した事のあるチアリーダーは、筆者も含めてサイドラインでのパフォーマンス中であり、ハーフタイムや4Qには必ず全員が出演できている状態に戻っている。応援チア、少なくともXリーグのチアリーダーにおいては「試合中の復帰」が可能であることがわかった。むしろ復帰を前提として、試合の最後までパフォーマンスのレベルを維持したまま応援をリードしていくために、チアリーダーは離脱することを「手段」としていたと考える。

パフォーマンスを維持する要素

欠員が出てパフォーマンスは成立する

インタビューを受けて、調査者が知る以上に欠員がいる中でパフォーマンスを行った事例はあることが分かった。但し、これはあくまでも「全員出演」が前提であり、その後の個人やチームのモチベーションは、そこまでに築いてきた人間関係が重要であると考えられる。メンバーに出演困難者がいても実際にパフォーマンスができていますが、その罪悪感を生み出すのは「メンバー全員が揃わないと成り立たないパフォーマンスがある」ということも言え、全員参加はチアリーダーの魅力であると共に、出演困難の際はチアリーダーの罪悪感に繋がる可能性がある。実際に試合中に離脱したチアリーダーにリザーブという提案をしてみると「あると気持ち的に楽である」とポジティブに捉えていたと同時に、全員参加に魅力を感じているので、補欠などの「必要がなければ出演しない」立場のメンバーを置くことには難儀を示している。チアリーダーに必要なのは補欠ではなく、休みたい時に休める環境であると考えられる。

チアリーダーが認識する「美しさ」

インタビューの中には「見た目」や「美しい」というワードが何度か出現した。チアリーダーの中にある美しさとはどういったものなのか。美しいという状態は、環境や個人によって想像するものや解釈するものが違い、定義することは困難ではある。その中で橋本は、「美しい」とは、「合理的な出来上がりかたをしているのを見たり聴いたりしたときに生まれる感動」と述べられ、スポーツで無駄のない均整のとれたものを美しさの1つとして表現している。

著書(2002.橋本)では「非合理的・感情的美しさ」をもう一つの美しさとしている。これは風景や文化に対する美しさを意味し、チアリーダーの表情や感情・情景等に起因する美しさとしてとらえる事ができるが、元気で明るく健康的な状態、不自然や無理ではない状態、すなわち「チアスピリット」が表現できている状態とも考えられる。

6. 結論

1. チアリーダーのモチベーションを維持する要素として全員出演が前提である

チアリーダーが試合を通してモチベーションを維持する為の最大の要素として、全員が出演できることが前程にあり、メンバー自身が出演したいといった念望を持っている事が挙げられた。

2. チアリーダーのパフォーマンスを維持する為に、メンバーの居場所と美しさを保つ心理的要素がある

チアリーダーの魅力の一つには、「全員出演」という要素がある事がわかったが、それに付随して、出演困難となったタイミングでのパフォーマンスからの離脱に「罪悪感」を感じるメンバーがいる。全員参加が喜びであることが、パフォーマンスからの離脱により他メンバーを含めてパフォーマンスに制限がかかること、また、離脱した本人自身が出演したいという念望から逸脱する事が出演から離脱する際の難点となる部分でもある。Sチームは全員参加が前提でリザーブを想定しなくともパフォーマンスやモチベーションを維持できていたのは、これらの要素を持ち合わせていたからである。